

報告 1

大中物産杯日本語スピーチ大会開催

4月14日(土)北京市内の伝媒大学において、「第12回大中物産日本語弁論大会」が開催されました。北京、天津の大学で日本語を学ぶ学生、初級の部10名、一般の部16名が、それぞれ与えられたテーマに沿って発表しました。

どなたも抑揚に富んだ綺麗な日本語で、時折ジェスチャーを交えて歯切れのいいスピーチを披露してくれました。中には日本に一度も行ったことのない学生もいて、そのレベルの高さにとても驚かされました。(池田)



スピーチの様子

報告 2

中日平和友好条約締結40周年記念 「中日友好春の茶会」開催

4月17日(木)、中国人民対外友好協会礼堂において、中日友好協会等が主催する「中日友好春の茶会」が行われました。

唐家璇会長や裏千家の千玄室前家元など日中両国の関係者が集い、長年にわたり日中友好交流の懸け橋として活躍された、中日友好協会理事・文化部副部長、劉徳有氏の講演の後、お庭で裏千家による日本の茶がふるまわれました。

和やかな春の日にふさわしい友好の催しとなり、日中関係が着実に進展していることを実感できる機会となりました。(池田)



茶会の様子

報告 3

大使公邸春の交流会にて新潟観光ツアーをPR

4月26日(木)、日本国大使公邸にて「大使公邸春の交流会」が開催されました。日中平和友好条約締結40周年を迎える今年は、日中の友好を深める様々なイベントが目白押し。毎年恒例のこの交流会ですが、今年は「日中平和友好条約締結40周年記念」を冠しての開催です。中国政府関係者やメディア関係者、企業関係者約900名を超える来賓が訪れました。

今年の交流会のテーマは『「和食」並びに和食に関連する商品のPR』。新紀元国際旅行社(JTB北京)と協同で「新潟の美食を食べに行く観光ツアー」をPRしました。

本来であれば、他県には負けない新潟自慢の美食をその場で味わっていただきたかったのですが、食品の輸入規制の影響により断念せざるを得ない状況です。日中平和友好条約締結 40 周年を迎え、日中関係改善の兆しが見えた今、食品の輸入規制早期解除への期待が大きく膨らみます。（大泉）



新潟市ブースの様子



新紀元国際旅行社が作成した新潟観光ツアー商品。

報告 4

上海世界旅游博覧会、初の単独出展

5月24日（木）から27日（日）までの4日間、上海展覽センターにて開催された「第15回上海世界旅游博覧会」へ出展し、新潟観光をPRしました。新潟市北京事務所単独での出展は今回が初めてとなります。

北京と新潟の間には直行便がありません。北京での観光PRにおいて最も苦戦するのが、北京から新潟への移動に時間とお金がかかるという点なのです。一方、新潟と週2回の直航便がある上海。飛行機での移動時間も約2時間半と、観光客にとっては比較的行きやすい目的地と言えるでしょう。

「新潟と言えばお米が美味しい」、「新潟と言え

ばスキー場」などの声を聞くことができました。直航便があるおかげでしょうか、新潟の知名度は北京よりも上々の印象です。一方で、「新潟は聞いたことがない」という方もたくさんいらっしゃいました。しかし、主な来場者は旅行に興味を持つ方々です。この日をきっかけに新潟を認知し、近い未来、旅行の目的地に選んでいただけることを期待します。

今回、力を入れた取り組みの一つが、「新潟」を正しく読んでもらうということでした。多くの中国の方が、「潟(xi)」の字を「泻(xie)」と誤認しています。実は、中国語で「泻」は「お腹を下す」という意味なのです。残念ながら、中国の大手旅行サイトでも新潟は「新泻」と記載されてしまっています。地道な取り組みではありますが、「新潟」の知名度をより高めるべく活動していきます。（大泉）



新潟市ブースの様子



古町芸妓の等身大パネルとの記念撮影会を実施。SNS等で発信してもらいました。



メディアにも「新潟」をPR!

西園寺 一晃先生の

中国レポート No.66 2018年5月

ここ数か月、世界はトランプと金正恩（キムジョンウン）に振り回された。北京でも話題はもっぱらこれだ。あれだけ罵り合っていた2人が、急転直下相手を「評価」する発言をし始め、会談を行う事を決めたのである。朝鮮半島の平和は、アジアだけでなく世界の平和にとって喜ばしい事なので、世界は歓迎した。ところが一転、「相手の不誠実」を理由に、トランプが会談のキャンセルを金正恩に通告した。世界は戸惑ったが、またまた一転、会談は予定通り行う事が決まり、5月末時点では具体的な準備作業が進んでいる。

両者の中を取り持ったのは、韓国の文在寅（ムンジェイン）だ。そして中国の習近平も動いた。中国にとって、北朝鮮を「丸抱え」するのは避けたいが、と言って「蚊帳の外」に置かれるのは耐え難い事なのだ。

中国は米朝会談を支持し、朝鮮半島の非核化の実現を望んでいる。金正恩を交渉のテーブルに就けさせるために、中国は国連決議に基づく圧力をかけ続けた。北朝鮮—朝鮮半島問題は中国にとって複雑で頭の痛いものである。中国の方針は明らかだ。それは①朝鮮半島が戦争の火種になっては困る。②関係国、つまり「6ヶ国協議」の枠名で、朝鮮半島の安定化、平和化を解決すべきである。③北朝鮮の核ミサイル問題は、主として米朝間で解決すべきである。④北朝鮮が核を放棄し、対米関係を改善し、国内的には改革と対外開放を通じ、「開かれた北朝鮮」が生まれることを望み、支持する。⑤北朝鮮が崩壊することは望まない。そのために中国は、国連の決定に従うという範囲内で、北朝鮮をサポートする。

中国が国連の決定に従い、北朝鮮への制裁に参加した結果、中朝関係は「史上最悪」と言われる状態になった。国際社会の北朝鮮に対する制裁、圧力は徐々に効き始め、北朝鮮はこの状態が続けば国は滅びると危機感を持ったのだろう。文在寅が手を差し伸べたのはまさに渡りに船であった。韓国に文在寅政権が生まれたことは、北朝鮮にとって実にラッキーなできごとであったのだ。

米朝緩和の実現と、その先にある朝鮮半島の非核化、朝鮮戦争の終結、米朝国交正常化は、中国にとって喜ばしい事であるが、実はそう単純な問題ではない。かつて中朝関係は朝鮮戦争を共に戦った「血で結ばれた同盟」と言われた。その後も中国は一貫して北朝鮮を支え続けた。しかし内実はドロドロしたものであった。特に1960年代半ば以降、中朝関係は複雑なものとなった。原因は中ソ論争から中ソ対立によるものである。当時から現在まで、北朝鮮の生き残り策は変わっていない。それは「瀬戸際政策」と「天秤政策」

と言える。

かつて、北朝鮮は悪化した中ソ関係を利用し、中国に対しては「ソ連カード」を使い、ソ連に対しては「中国カード」を使った。時には中国寄り、時にはソ連寄りになり、両国の援助を引き出してきた。中ソともそれを重々承知の上で、北朝鮮を引き留めるため膨大な支出をしてきた。このやり方は金日成（キムイルソン）—金正日（キムジョンイル）—金正恩（キムジョンウン）と引き継がれている。ところがソ連が崩壊し、ロシア時代となり、ロシアは北朝鮮を中国と取り合う余裕も興味も無くした。北朝鮮は大国中口を天秤にかける事ができなくなり、唯一の生き残り策として核兵器開発に走ったのである。ところが北朝鮮の「天秤政策」は形を変えて復活するかもしれない。対象は米中だ。

文在寅の太陽政策に乗った金正恩は、4月27日に板門店で南北首脳会談を行う事で文在寅と一致、世界はこれを「歴史的会談」と評価した。さらにトランプと金正恩は6月に米朝首脳会談を開くことで一致した。金正恩の電撃訪中は3月26日であったが、絶妙なタイミングだった。南北首脳会談の直前であり、すでに日時と場所は未定ながら米朝首脳会談が決まっていた。

金正恩にとっては「孤立無援」イメージを払拭し、中国が北朝鮮の「後ろ盾」であると世界にアピールし、米国をけん制する狙いがあった。中国としては大いにメンツが立ったわけである。金正恩の訪中なしに南北会談と米朝会談が実現すれば、中国は完全に「蚊帳の外」に置かれることになる。さらにトランプに貿易面で宣戦布告を受けた中国は、世界戦略の面で米国に対し「北朝鮮カード」を持つことになった。金正恩の2回目の非公式訪中は5月7日であった。これは南北首脳会談の直後であり、米朝首脳会談の直前であった。中国はこの一連の国際政治ショーの「隠れた主役」として存在感を増すことができたのである。

金正恩は米国に対し「中国カード」を持った。しかしそれにより過剰な強気な態度がトランプの不興を買い、トランプをして「会談キャンセル」と言わせたのである。このトランプの脅しは、対北朝鮮であり、対中国でもあった。しかし、キャンセルはトランプの本音ではなかった。半ば冗談であっても、国際社会では、米朝会談が成功すれば、トランプは「ノーベル平和賞」ものだという声さえ出たのである。苦戦が予想される秋の中間選挙対策のためにも、トランプは引くことはできないのである。米朝は予定通り会談は行うことで一致した。もしかしたら本当に米朝首脳会談は成功するかもしれない。そして、北朝鮮が核を完全放棄すれば、米国は何ら北朝鮮を敵視する理由は無くなる。そればかりか米国はレアメタルなど、北朝鮮の豊富な地下資源利権を手に入れることができるかもしれない。さらに、北朝鮮を中国から引き離し、逆に中国に対し「北朝鮮カード」を握ることができるかもしれない。そして北東アジアで米国の影響力を拡大することができる。北朝鮮は中国に対し、「米国カード」を手に入れる可能性を有したのである。

中国は米朝首脳会談の成功を望みながら、その一方で1つのトラウマに悩まされている。それはベトナムである。あのベトナム戦争期間、中国は全力で米国と戦うベトナムを支援した。そのベトナムは今や米国との関係がますます緊密となり、中国との関係は冷え切っている。中国が内心恐れているのは、将来北朝鮮が「ベトナム化」して、親米になる事である。今後相対的に弱体化が始まった米国と、経済力を背景に台頭する中国とのつばせり合いは激化するだろう。中国が北朝鮮の崩壊を望まないのは、膨大な難民が押し掛ける恐怖もあるが、米国の軍事力が現在の中朝国境まで迫ることである。これは中国にとって「悪夢」なのである。北朝鮮の存在は中国にとって米中の緩衝地帯となっている。もし北朝鮮が親米になれば、「悪夢」は現実のものとなるかもしれない。

北東アジアはこれからどう動くかわからないが、中国にとってあくまで国際政治における「主要な相手」は米国である。習近平は比較的冷静に、客観的に情勢を見ているようだ。

現時点で、習近平は対米関係をあまり悪くしたくないと思っている。ある程度の妥協をしてでも、対米関係の緩和を志向している。中国内には「対米強硬派」も存在する。米国には断固として対処すべきで、売られたケンカは正面から受けるべきだとする主張だ。しかし、習近平はその主張には乗っていない。米中関係は目下「貿易戦争」が焦点となっているが、中国にとって、それは表面的

【筆者プロフィール】

西園寺 一晃（さいおんじ かずてる）氏

1944年生まれ

- 明治の元勳・公爵・首相・枢密院議長である西園寺公望氏を曾祖父に持つ。
- 西園寺公一（きんかず）氏（第一回参議院議員・日中文化交流協会常任理事）の長男。
- 北京大学経済学部卒業
- 朝日新聞社に在籍中は、日中関係の調査研究室長などを歴任。退職後も中国問題の調査、研究にあたる。
- 現在工学院大学客員教授、北京大学客員教授、伝媒大学客員教授、北京城市大学客員教授

なもので、本質は「政治戦争」と認識する人が多い。目下、中国にとって「核心的利益」につながる、つまり一点の妥協も許されない地域が2つある。1つは台湾、もう1つは南シナ海だ。米国はこのカードを握っている。すでに「台湾カード」を出し始めた。近く米国の高官が台湾を訪問するだろう。また、米国国防省は5月23日声明を発表し、6月に行われる環太平洋合同演習（リムパック・英米仏豪など20数か国参加）への中国に対する招待を取り消し、南シナ海での中国の行動を批判した。

中国は不安定なアジア情勢を見据え、打つべき手は打とうとしている。韓国との関係は改善した。目下中国にとって最重要国は日本とインドだ。この両国が米国と共に中国に向かってきたら一大事なのだ。最近目立つのは、中印関係の緩和と日中関係の改善だ。両国とは同じように領土問題を抱えている。もちろん日本、インドにも緩和、改善しなければならない理由があり、それが一致したという事である。日中関係から言えば、当面中国は「歴史問題」や「領土問題」を持ち出さないだろう。東シナ海の波は静かになるはずだ。

戦略的に物事を考える中国人。その中でも国際問題を専門とする学者、研究者は目下アジア情勢に関連し、侃々諤々の議論をしている。以上は彼らと議論しながら感じた事を書いてみた。（止）

■ ■ お知らせ ■ ■

「ビジネス支援サービス」をご活用ください。

新潟市の中小企業、団体等が北京市内で経済活動を行うに当たり、様々な支援を行っています。お気軽にお問い合わせください。詳しくはこちらから

http://city.niigata.org.cn/business_support_service.htm